

俳優對談記を讀んで

森　　ほ　　の　　ほ

中央公論の七月特輯號に、三宅周太郎氏の「俳優對談記」の最終篇として六代目菊五郎の座談が載つてゐた。それは三宅氏も言つてゐるやうに、わざとどん尻に廻しただけ、氏自身もかなり期待をかけたものであつたらう。私も亦期待を持つて讀ませて貰つた一人である。それだけにその中にどうも氣になる事がある。

それは「野崎」で久作がお染、久松の二人に意見の件で——久作が「在所は勿論大阪中に指さされ」のチョボを受けて「人交りがなりませうかいの」のセリフを言ひ、「コレ／＼／＼」と疊み込んで、あとをチョボへ渡すところがある。大がい誰でもあたりまへに「コレ／＼／＼」といふのだが、それぢや

アお染が「堀川」のお猿さんになつて踊り出したくなる。あれは初めのコレは上手家體の中に寝てゐる老婆に當て込んで言ひ、二度目のコレは久松へ言ひ、三度目をお染にコレと叮嚀に言ふつまりコレの言ひ方を三人三様に分けて言ふのが本當だ——と、かういふことが載つてゐる。これは古老道八氏の自説かどうかよくは分らないが兎も角も同氏の話であつて、それに對して六代目丈は「確にさうだと思ふ」と賛意を表してゐる。

さすがに道八氏の話だけに全く面白い説である。コレ／＼／＼の重言がいかにも生かされてゐる。が、お説としては面白いが、私はどうも六代目丈と同じ様にさう容易く同意はいたしかね

るのである。といふのは——あの重言は、半諷ひ物であり、半語り物であるところの淨瑠璃のリズムとか、ハヅミとかいふやうなもので、次の句の「爰の道理を」の爰の、コと頭韻を踏んでゐることが、一層快い響を耳に傳へてくれるのである。と言つたからといつて勿論「コレ／＼／＼」がリズムだけのものでないことは改めて斷るまでもない

第一、三様に言ひ分けるといふのが可笑しいと思ふ。久作はお染と久松の若い二人に對して意見してゐるのであつて、「コレ」の一つを奥に寝てゐる病母へ持つて行くといふのは、殊更に三人三様を作らうとした痕跡を残すものである。これに類した説は、よく芝居の方などでも耳にするところのもので例へば「玄治店」の與三郎の顔の疵は三筋に描くのが本當で、蝙蝠安の「三筋に蝙蝠は附き物だ」昔は八代目を當て込んで、そんなセリフを言つたことがあるらしい。のセリフも生きて來るのだといふ、それなどがさうである

昔の芝居裏の古老や所謂樂屋名人などの言ひさうな説である。

前にも申したやうに私は「コレ／＼」を寧ろ音樂的に（といつて踊り出すやうで、お説の猿廻し同様になつては勿論困るが）取扱ふべきだ、取り扱ふだけで充分だと思つてゐる。それは、あの謡曲の、例へば「刈」の笠の段にある「さら、さら、ざつと」の様な扱ひ方に行けば、それでいいので要はその扱ひ方にあるのではないかと思ふのである。

尙、ついでに同じ對談中に、「合邦」の話の件で、合邦が玉手御前の手を強く引ばつて納戸へ連れて這入るやうに三宅氏だか六代目丈だかが言つてゐるが、これは本文にもある通り、「見返りもせず行く父親」で合邦は既に暖簾口へ姿を消してゐる筈で、勿論老母の間違ひであらう。それとも一つは、先代勘十郎の道成寺の話の件で、同女が六代目の白拍子を見て「金冠りがあ動いていいのかい」と言つたといふ

が、その「金冠」はこれも勿論「金烏帽子」の言ひ違ひであらう。併し、六代目自身の詞にも、「初め金冠りを著けてゐる間は一切踊つてはいけない」などと濟まして金冠りと言つてゐるが白拍子が金冠を著けたら祭りのお稚兒になつてしまふだらう。神經の極めて鋭い六代目丈や、物事にきちやうめんな三宅氏の對談筆記だけに、こんなつまらぬ間違も、たゞ何だか似合はしからず思へるのである。

金冠の話のついでにこんな話のあるのを想ひ出したから書き添へよう——これは能の方の話だが——あの「羽衣」などで著ける天冠にはえうらくがピラ／＼下がつてゐる。あのえうらくといふものが兎角凝りたがる——掬みつきたがるもので、チャラ／＼ともつれ合ふだけならいいが、面（おもて）へぶツつかりたがるのである。シテはまさかに、六代目丈の話のやうに、踊つてゐるわけでもないが、未熟人達にはさういふ人知れぬ苦勞がある。ところ

が、これが万三郎氏などになると、どう動いてもえうらくの凝ることが無いえうらくは前後には揺れるが、左右に揺れてもつれるやうなことは無いのである——これは實は万三郎氏の高弟某氏が私への述懐なのである。この佳話をもつて揚げ足取りに類するかの如き愚見を宜しく相殺して頂かう——。

稽古屋

卅年ばかり前までは町々に素人淨瑠璃語る者、靱に南金。堂島に髭久。順慶町に平助。吳後。塚五。ひら八など僅に五六人、至極珍しかりしに今は蟻の涌くが如く名も覚えられぬ程ありて稽古屋忙しく、四五段あれば師匠となれる三都の有難さ、漸く師匠の毒氣吹込み足れば上達の途を失ひ、南鐐一片を六十日に割れば一日十二文で晝夜樂まる、奢侈にあらず榮耀にあらず程よき娛樂なるべし。稽古屋の歌に
こねは上折々来るは中の弟子

毎日来るは下々の弟子